

令和7年度 第1回 南幌町総合教育会議次第

と き 令和7年12月19日 (金)

午後3時45分

ところ 南幌町生涯学習センター「ぽろろ」

3階会議室

1 開 会

2 挨 捶 南幌町長 大崎貞二

3 協議事項

(1) 南幌町におけるＩＣＴ教育の現状について

(2) その他

4 そ の 他

5 閉 会

「南幌町におけるＩＣＴ教育の現状について」

令和7年12月19日 南幌町総合教育会議

◆ 2019年（令和元年度）

- ・文部科学省が「GIGAスクール構想」を発表（第1期）
目的：すべての児童生徒に最適な学びを提供するため
①一人1台端末の整備
②高速大容量の校内通信ネットワーク整備を全国一斉に進める
(当初は5年間かけて整備する計画だった)

◆ 2020年（令和2年度）

- ・新型コロナウイルス流行 → 前倒しで整備が加速
- ・全国的な臨時休校を受け、オンライン学習環境の整備が急務に
- ・国が補正予算を投入し、整備計画を一気に前倒し、多くの自治体で一人1台端末が2021年3月までに配備完了
→南幌町においても「コロナ交付金」を活用し、児童生徒一人1台による学習環境を整備するため、小中学校それぞれにクロームブック端末と電子黒板導入、ネットワーク環境を構築【総事業費61,915千円】
- ・新学習ソフト「スマイルネクスト」、クラウドサービス利用が拡大
- ・学習クラウド基盤としてのGoogle Workspaceの導入
- ・プログラミング教育が学習指導要領の改訂により導入される

↓

【第1期「配るフェーズ」～多くの自治体が活用の壁に直面している】

◆ 2024年（令和6年度）～現在

- ・文部科学省がNEXT GIGAとしてGIGAスクール構想（第2期）を発表
- ・学習用端末の更新が各自治体で進行中
→南幌町は2026年（令和8年度）に更新予定（約500台）
- ・校務のDX化、教員研修と運用支援の充実が求められる
- ・令和6年10月から本間ICT支援員（地域おこし協力隊）を採用
→令和7年からプログラミング授業に参画
- ・「ICTを日常授業の中で自然に使う段階」へ移行
- ・生成AI（学習支援AI）をどう教育に生かすか議論が進んでいる

↓

【第2期「活かすフェーズ」～自治体判断で大きく差がつくフェーズ】

※第1期で整備された環境を「目的」から「手段」に変え、「使える・使いこなせるICT環境」へ深化する



南幌町総合教育会議 資料

南幌町におけるICT教育

プログラミング授業の現状と課題、対策

令和7年12月19日
南幌町教育委員会

目次と構成

#1 ふたつのICT教育

ICT教育は、ふたつに大別できる。

個別最適

全体最適

#2 個別最適な学び

ひとつは、個を伸ばす学びである。

個別最適

全体最適

#3 全体最適な学び

もうひとつは、いわゆるプログラミング授業。

個別最適

全体最適

#4 #5 #6 プログラミング授業の実情

プログラム教育実施指針の必要性。

個別最適

全体最適

#7 今後の展開

スケジューリング。

個別最適

全体最適

#8 #9 #10 型にとらわれない方法論

正攻法の限界と新授業アイディアの提案。

個別最適

全体最適

#11 なんぽろスチームラボ・冬のご紹介

どうぞご来場ください。

個別最適

全体最適

I

ふたつのICT教育

個別最適

全体最適

個別最適な学び

児童生徒の個性に応じ
それぞれの才能を伸ばす教育

全体最適な学び

児童生徒全体のICTスキルを
底上げする教育

#2

個別最適な学び

個別最適

全体最適



目的は、個性豊かなイノベーション人材の育成

#3

全体最適な学び

個別最適

全体最適

いわゆるプログラミング授業

主要なプログラム言語



Google Apps Script



目的は、均質なスキルを持つプログラマー集団の育成

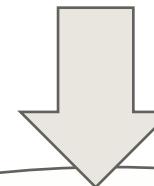
#4

プログラミング授業の実情

個別最適

全体最適

2020年より必修化（文科省）



南幌町

カリキュラムへの取り込み（教科化）ができない

有志の教職員による散発的な取り組みに限られている
(ICT支援員がサポート)

なぜ、しないのか なぜ、できないのか

教育委員会による分析

■制度的要因

「必修化＝教科化」ではない。努力義務であること。

■構造的要因

専門人材の不在

カリキュラム指定のあいまいさ（どの授業で教えるか 数学？理科？）

■現場的要因

教える自信がない

学ぶ時間がない

■制度的課題への対処

- ・教科化の方針を明確にする

■構造的課題への対処

- ・ICT支援員の推進体制への取り組み（地域おこし協力隊制度による増員も視野に）
- ・教科を定義する（小学校では数学、中学校では技術家庭科、など）

■現場的課題への対処

- ・働き方改革の推進による、余力の確保
- ・外部プログラミング研修受講の推進（報奨制度も検討）

推進には、町独自の「**「プログラミング教育実施指針」**制定を検討する必要がある。

#7

今後の展開

個別最適

全体最適

	12	R8.1	R8.2	R8.3	R8.4	R8.5	R8.6	R8.7	R8.8
校務システム更新	■見積確定				■プロポーザル ■発注				★本稼働
プログラミング教育	教育指針作成								
	カリキュラム作成								
	試行								
AI教育	教員向け研修		■						
	生徒向け研修			■					
	授業での活用				■				
なんぽろスチームラボ	■							■	

(要検討)

個別最適

全体最適

GIGAスクール第2期は「活用」の段階であり
自治体の意思決定により成果に大きな差が付きます

ご意見、ご判断

よろしくおねがいします

#8

型にとらわれない方法論

個別最適

全体最適

ホリゾンタル（水平展開式）
プログラミング教育

#9

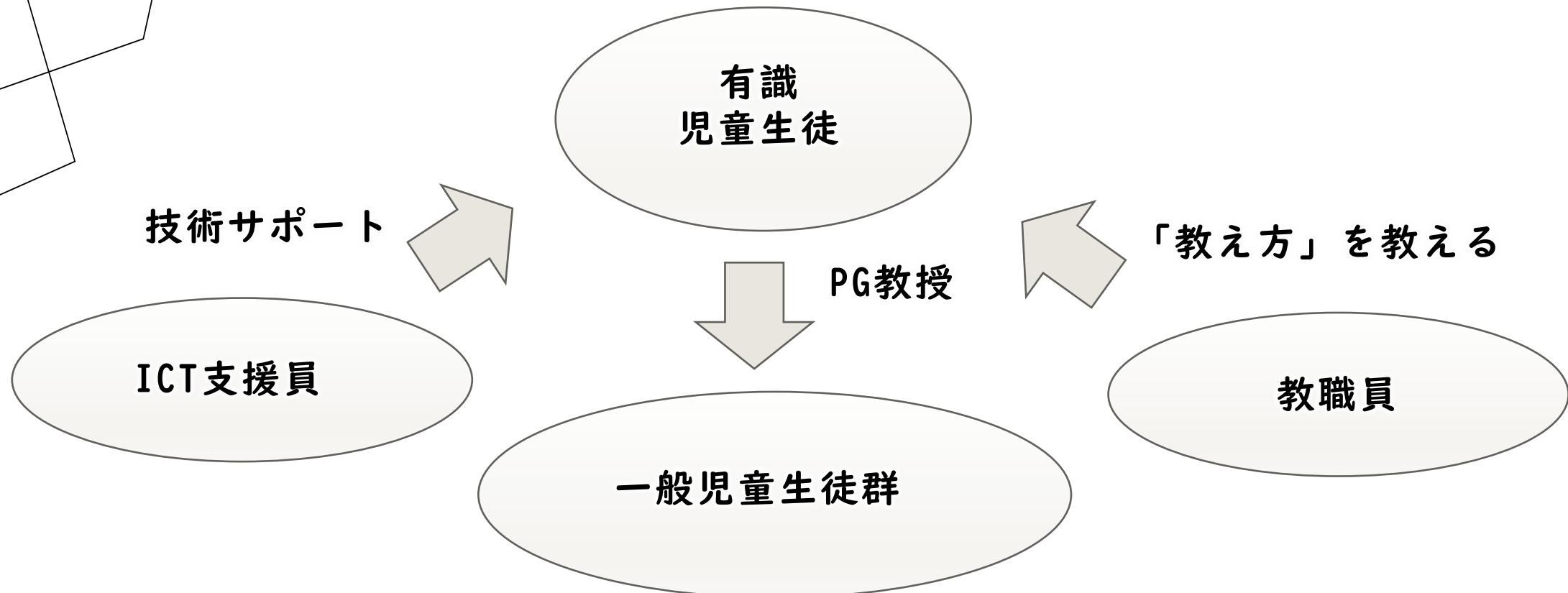
型にとらわれない方法論

個別最適

全体最適

ホリゾンタル プログラミング教育

PGスキルの高い児童生徒を有識者とし、授業講師に充てる。



メリット・効果等

ホリゾンタル プログラミング教育

1. 有識教職員に比して、有識児童生徒は絶対数が多いため確保が容易である。
2. 教職員は、研修や自己学習に時間を割くことなく児童生徒による授業を通じてスキルを習得できる。
3. ICT支援員は「基礎から教える」傾向があるのに対し児童生徒は「ゴールから教え、学ぶ」ことに長ける。
4. 児童生徒の「教える喜び」を喚起できる。

||

個別最適

全体最適

参加申し込みフォーム
(要予約)



公式Instagram



N. STEAMLAB

夏にご好評いただきました「なんぽろスチームラボ」の
冬開催が決定しました!!
参加人数に限りがありますので、予約はお早目に!!



ぽろろ2階 交流室

南幌町教育委員会 011-378-6620 担当:本間

【令和7年12月19日】

令和7年度

南幌町部活動地域展開_将来ビジョン

～スポーツ少年団本部を核とした持続可能な体制構築を目指して～



南幌町教育委員会 生涯学習課
社会教育係

✉ syakai@town.nanporo.hokkaido.jp
🌐 <https://www.town.nanporo.hokkaido.jp/>

01 南幌中学校の部活動の現状【令和7年度】

【現状】

- 令和7年度5月時点で、**南幌中学校**には**9つの部活動**があり、内、スポーツ系が7部、文化系が2部、**部員は114名**であり、**全校生徒の78.6%が部活動に加入**しており、加入率は高い。担当教諭は兼任含め、各部2名体制で合計17名の教諭が対応している。
- 柔道部、女子バレー部は『地域クラブ（特設部）』として活動しており、担当教諭は配置されているものの、地域指導者が指導しており、『少年団』として位置付けられている。
- 野球部とサッカー部は、令和7年度中体連は近隣中学校との合同チームで出場。現在、新たな運営体制を検討中。
- 入部傾向としては、少年団で経験した種目の部活動にスライドするケースが多いが、新しい種目にチャレンジする団員も一定程度いる。スポーツ系の少年団に所属していた児童が中学校で吹奏楽部や美術部に入部するケースもあり、**自己選択と新しいチャレンジの場**となっている。

部活動	1年	2年	3年	合 計	担当教諭
野球【合同】	0	5	4	9	2
サッカー【合同】	0	3	3	6	2
バドミントン	5	9	4	18	2
男子バスケ	7	1	2	10	1+兼1
女子バスケ	2	1	2	5	1+兼1
吹奏楽	5	14	0	19	2
美術	9	12	7	28	2
柔道【クラブ】	2	4	4	10	1
女子バレー部【クラブ】	4	2	3	9	兼2
合 計	34	51	29	114	13+兼4
生徒数	46	55	44	145	
加入率	73.9%	92.7%	65.9%	78.6%	

02 少年団活動の現状【R7年度】

【現状】

- 令和7年度5月時点で、南幌町には**7つの少年団**があり、**団員は155名**が所属しており、**全校児童の43.5%**が少年団に加入している。
指導者は、**合計24名**登録しており、各少年団で父母会が存在しており、活動をサポートしている。
- 柔道少年団とバレー少年団は、既に中学校と連携して活動しており、**小中9年間で指導**している。
- 若干名ではあるが、町外からの参加団員もあり（野球、柔道、ミニバス）、地元には少年団が無い児童の活動の受け皿になっている。
- 各少年団の指導者や保護者会からの選出役員で構成される『スポーツ少年団本部』は活発に活動しており、運動記録会や各イベント、指導者・リーダー講習会等、年間の活動が定着している。
- 各少年団の入団促進のため、少年団フェスティバルやジュニアアスリート特別教室を開催しており、少年団選択の機会づくりも行っている。
- 各少年団の活動助成金（1人10,000円）や地元大会の助成制度、遠征時のマイクロバス借用、町内施設の減免使用等、**各少年団の活動を支える仕組みが確立**している。

少年団	1年	2年	3年	4年	5年	6年	合計	※中学生	指導者
野球	1	6	4	3	1	5	20	0	5
柔道	4	5	7	6	6	6	36	10	4
ミニバス	2	5	6	2	6	5	25	0	3
バドミントン	0	2	3	1	7	4	17	0	4
サッカー	1	4	6	5	10	8	34	0	2
バレー	1	2	1	6	2	6	18	18 女子	3
空手	0	2	0	3	1	0	8	2	2
合計	9	26	27	26	33	34	155	30	24
児童数	74	65	55	59	51	52	356		
加入率	12.1%	40.0%	49.0%	44.0%	64.7%	65.3%	43.5%		

03 南幌町の部活動地域展開に向けて【運営主体】

区分		類型例	運営形態
市区町村運営型	運営例	地域団体・人材活用型	市区町村教委が地域の団体（地域スポーツ団体や地元企業、大学等）や地域の指導者と連携し、運営する形で実施
任意団体設立型		任意団体設立型	市区町村が任意団体（一般社団法人や協議会等）を創設し、任意団体が運営する形として実施
競技団体連携型		競技団体連携型	市区町村が競技団体と連携して運営する形として実施

【拠点校方式による部活動】

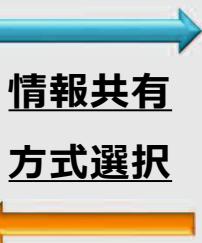
- ①南幌中学校のみの部員では、大会出場が出来ない、または安定的、継続的な部活動が難しい。
- ②南幌中学校にその種目を指導できる担当教諭がいる、または少年団等地域指導者が『外部指導者』として指導できる体制である。
- ③近隣市町【教委・中学校】との連携が図られている。

上記前提条件のもと、『**南幌中学校を拠点とする拠点校型部活動**』は、部活動地域展開の有効な選択肢として検討する。

【南幌町の現状推察】

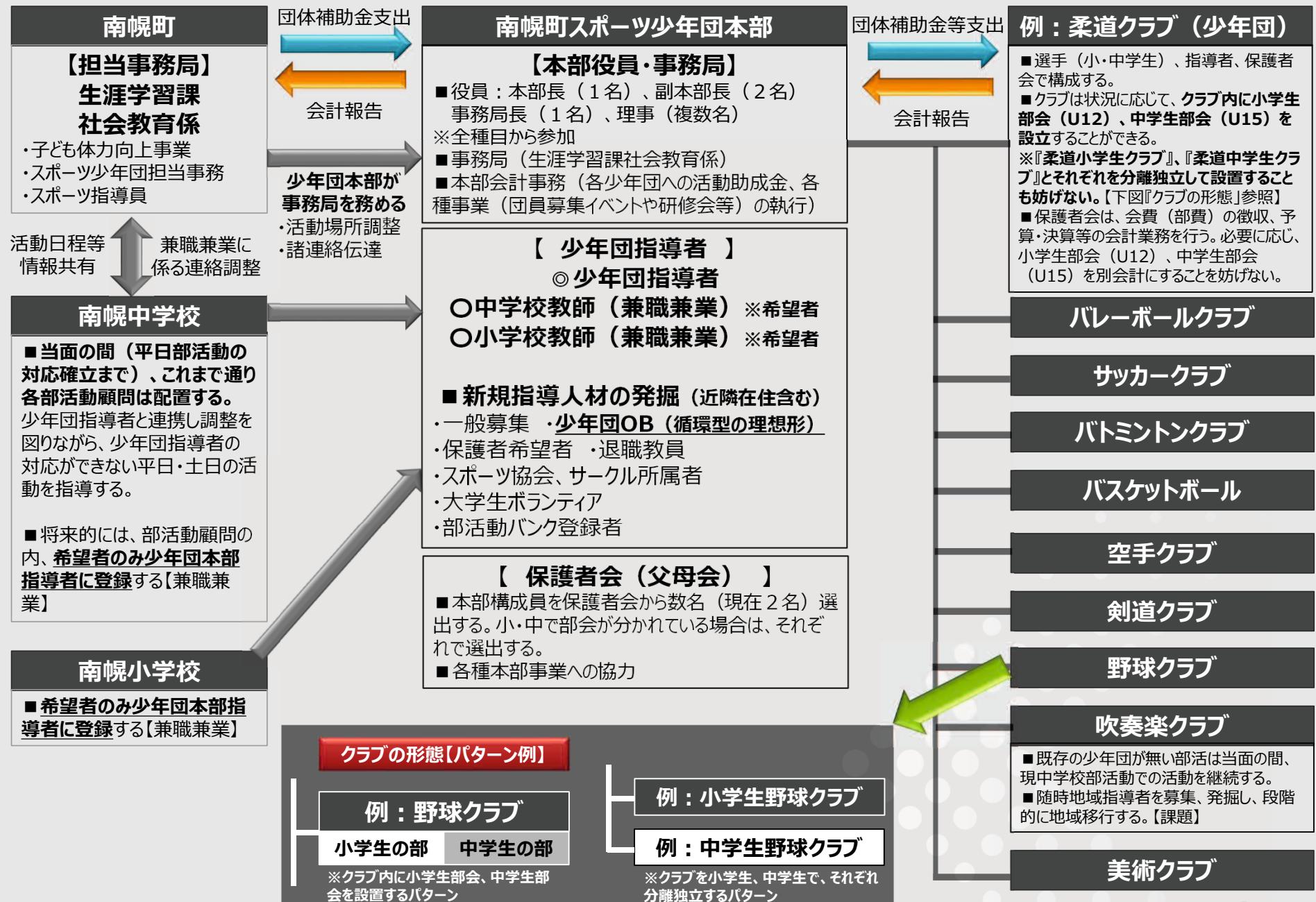
- 参加部員が減少し、中学校部活動の特にチームスポーツ（野球、サッカー、バスケットボール、バレーボール）が**単独校での出場ができず合同チームで出場したり、今後、単独校での出場が難しい状況**となっている。**→単独校では持続可能な体制継続が困難。**
- その種目の競技経験が無い、または指導経験が浅い教師が指導せざるを得なかつたり、休日も含めた指導時間が**教師にとって大きな業務負担**となっている。
- 近隣においても、部活動地域移行の議論がスタートしており、近隣市町との連携はもとより、具体的な合同チーム編成や大会出場を協議する際には、ある程度、近隣と足並みを揃えた体制が望ましい。**→市町村教育委員会での情報共有**

- 南幌町では、既に柔道部、女子バレーボール部が特設部として地域指導者（少年団指導者）による運営により、**活動が継続し成功を収めている優良事例**がある。
- **少年団本部事業は活発に行われており、本部内の指導者間での連携を円滑に図ることができる。**また、近年少年団指導者が中学校部活動の外部指導者になったり、少年団と中学校部活動を合わせて指導するケースがあり、他少年団指導者の繋がりが中学校部活動の指導（練習試合やローカル大会への参加等）でも有益に作用する場合がある。
- 選手や父母会に請われる場合や指導者の自主的な活動など、取り組みのきっかけは様々だが、既に少年団指導者が中学生を任意で習い事のような位置付けで指導している。【ミニバス、バドミントン】



南幌町においては**『市町村運営型』 → 『競技団体連携型【スポーツ少年団本部】』**を運営形態として第一義に検討すべきと考える。

04 部活動地域展開の運営体制イメージ【地域展開完了】



04 南幌中学校部活動 & 地域クラブの現状

